

Title	『無痛文明論』への批判に答えて：若干のコメント
Author(s)	森岡, 正博
Citation	臨床哲学. 2005, 6, p. 75-78
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/5053
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

『無痛文明論』への批判に答えて

——若干のコメント

森岡 正博

『無痛文明論』を2003年10月に出版してから、たくさんコメントをいただいた。現代文明の全体を批判するというわけだから、多くの人のアンテナにひっかかったのだろう。書評もたくさん出た。わたし自身、この本を、いままで書いたもっとも重要な作品と位置づけているから、コメントや批判がたくさん出されることはとてもうれしい。

だが、いままでのところ、本格的な批判論文というものは出されていない。今回、三浦隆宏、吉本陵という若い研究者たちから出された批判は、「無痛文明論」に対する最初の本格的な批判であると思われる。彼らの批判を読んで、いくつか考えることがあったので、以下、簡単になるがそれについて考えてみたい。彼らの批判はそれぞれ鋭いところを突いているので、いまの私の力量では正面から答えられない部分もあるし、また「無痛文明論」を前向きに解体しないと答えられない部分もあるように思う。

まず三浦の批判であるが、彼の論点は「生命のよろこび」とは何かという一点に収斂する。「無痛文明論」では、「生命のよろこび」が鍵概念として登場するが、その内容が明示的に記述されるのは第1章のみであり、その後まったく内容が深められないのはなぜかと三浦は問う。「生命のよろこび」という概念は、実は、無痛文明の「彼岸」に位置しており、われわれは実のところそれを無痛文明の中で実体験することはできないのではないかと三浦は考える。そのような「生命のよろこび」の彼岸性に立脚している無痛文明論という議論は、したがって独特の危うさをはらんでいるように見えるのである。

「生命のよろこび」の概念は、たしかに「無痛文明論」の叙述が進むにつれて、徐々に後景に退いていく。これは三浦に指摘されるまで気づかなかったことだ。その理由は、おそらく、私の中で、「生命のよろこび」の概念が、「生命の欲望」の概念に徐々に置き換わっていったことと関係しているように思われる。自己変容を達成したときに予期せず訪れるものとしての「生命のよろこび」は、「無痛文明論」の叙述の中では、それを積極的に欲望するところの「生命の欲望」の概念へと内発的に発展する、と読むこともできそうである。「生命の欲望」については、同書の後半においてさらに議論を深めた。しかし、「生命のよろこび」の議論が「生命の欲望」の議論へと展開したときに、そこで何か重要な論点を取りこぼされてしまっている可能性は十分にある。この点は、慎重に検討しなければならないだろう。

三浦は次のような推測を述べている。無痛化する現代文明下においては、「生命のよろこび」を、人々が実際には体験することができないのではないか。可能なのは、そのよろこびの存

在をただ「名指す」「予測する」ことだけではないのか、と。したがって、突き詰めて考えれば、「生命のよろこび」とは「よろこびへの期待」という形でしか語れないのではないかと。

これについては、とりあえず以下のように応答しておきたい。すなわち、私は「生命のよろこび」というものを、そこまで神秘化して捉えてはいないのだ。端的に言えば、「生命のよろこび」とは、人間が長い人生を生きているうちに、実際に体験することがあり得るようなものである。そして森岡もそれを実際に体験したことがある。したがって、「生命のよろこび」をいまここで体験することは、不可能ではないのである。ただ、社会全体の無痛化が進んでいる以上、「生命のよろこび」を体験する可能性が縮減されていることもまた事実であると思われる。そのことは本書で繰り返し書いた。しかしそれは縮減されているのであって、絶滅しているのではない。この社会は無痛化に向けてまっしぐらに進んではいるものの、まだ完全には無痛化されていない。「生命のよろこび」はまだあちこちで生き続けているのである。

しかしながら、もし社会の無痛化がさらに進行していけば、三浦の言うように、「生命のよろこび」を体験する可能性はどんどん縮減されるわけだから、ちょうど知床の原生林のように、いずれは体験することがほとんど稀な「形而上学的」な存在となるかもしれない。

三浦はさらに、「生命のよろこび」を体験したことのない人間が、いま与えられている「快適さ」「安定」を捨て去ってまで「生命のよろこび」を得ようとするだろうかという疑問を呈している。これはもっともな疑問であり、私も「無痛文明論」の中で、「生命のよろこび」のほうに人々の欲望をそそのかして導き入れる技が必要だと書いた。その対処法の実効性について三浦が疑問を呈しているのなら、たしかにその実効性を保証するものはないと言わざるを得ないだろう。これは今後の課題である。

三浦の問題提起のうち、私がかもっとも根本的だと思ったのは、次のものである。すなわち、自己が根本的に変容したときに予期しない形で訪れるものが、なぜ「よろこび」として感受されるのかという点である。自己変容が起きたときに、「不快感」とか「達成感」ではなく、「よろこび」が生起するというのは、ほんとうなのか、そしてそれはなぜなのか。そもそも無痛化する現代社会の中ではわれわれは「よろこび不感症」にかかっているわけだから、「よろこび」の感情が襲ってくるというのは非常に不可解であるということなのだ。

これについても、私は理論的な答えをいまだ準備できていない。「よろこび」としか言いようのない個人的な体験があったのは確かだが、それを理論化するには至っていない。そのためには、「よろこび」の感情というものを、さらに緻密に分析してみる必要がある。「無痛文明論」ではそれを行なえなかったのが、将来の課題ということになるだろう。直観的には、自己を解体して、中心軸にそって自己変容したときに訪れる、「これでいいんだ」「昔のほうがよかったとはまったく思わない」という〈自己肯定〉の感覚と、密接に結びついているように思われる。「よろこび」とは、「肯定」の別名なのかもしれない。このあたりのことをさらに考えなくてはならない。

次に、吉本の批判に対するコメントを述べていきたい。

吉本は、中心軸というものが、たえず反復される中心軸の発見のプロセスとしてしか見い

だされないという点に着目し、「ほんとうの私」というものは、不断の自己批判を通じてのみ得られるものであって、「深層アイデンティティではないもの」という否定形を通じてのみ把握されるのだと指摘する。すなわち、「ほんとうの私」というものがあるとするれば、それは、否定形の形でのみ語られ、みいだされることになるのである、と。

吉本はここから次のように言う。この、中心軸にそって生き切ろうとする「ほんとうの私」こそが、無痛文明と戦う主体であるところの「戦士」であるのだが、その主体である戦士の内実は常に「否定形」を通じてしか得られないことになる。しかし、それでいいのか。無痛文明と戦うための、「ほんとうの私」とは、いったいどんな内実のものなのか、いったいどんな姿をしているのかを、この私自身がポジティブに捉えられないというような状況下で、私は戦士としてほんとうに戦えるのか、という疑問である。ふつう、戦いを優勢に進めるためには、戦うための本陣を強固に固めておかなければならないのは常識だが、その戦いのための本陣である「戦士」の姿が、否定形でしかとらえられないということでもいいのか、影のようなものであっていいのかというわけである。

吉本のこの指摘は、非常に重要なものであると思われる。吉本はさらに、私が無痛本流とうまく戦えているときにのみ、そのつど「ほんとうの私＝戦う私」が世界に生起する、ということに論理的にはなっているのではないかと指摘する。しかしそれは、「ほんとうの私＝戦う私」というものが、無痛文明との関係においてしか成立しないことをもまた意味しており、この点において、「ほんとうの私＝戦う私」は無痛文明に依存し、取り込まれ、内部化してしまっていることにならないかという問題を提起している。

これは巨大な問いである。まず、「ほんとうの私＝戦う私」がポジティブに捉えられないという点に関して言えば、私は以下のように考えている。つまり、「ほんとうの私＝戦う私」は、たしかに確固たる〈実体〉として肯定形で捉えることはできないのだが、しかしながら「中心軸通路」といういわば〈実体〉を拒否したような存在様態においてまさにポジティブに捉えられるのではないか、と思うのである。「中心軸通路」とはまさに中心が空洞になっている通路であり、その存在様態それ自体が一種の否定形で成立しているとも言える。主体を、〈実体〉としてではなく、〈通路〉として捉えることによって、否定形ではありながらもポジティブなものとしてそれを確固と捉えることができるのではないだろうか。

また、「ほんとうの私＝戦う私」は、無痛文明に依存してしか成立しないという点であるが、それはそのとおりかもしれないと私は考える。ただ、事態はおそらく逆なのであって、無痛文明という渦のただ中から、「ほんとうの私＝戦う私」というものが、たえず立ち上がり、生成してくる、という形でのみ、「ほんとうの私＝戦う私」は成立し得るということではないだろうか。発芽する芽は大地に依存しているとも言えるが、同時に、大地のただ中から、大地を栄養分としつつ、大地を退ける形で、芽は発芽すると捉えることもできるはずだ。無痛文明の外側にあったものが内部化されるのではなく、無痛文明それ自体から、戦う主体それ自体が生成するとは考えられないだろうか。

以上の点は、さらに深く追求していくべき大きな論点である。「無痛文明論」でも述べたこ

とだが、この点を掘り下げることによって、おそらく「主体」をめぐる根本的な転換が、哲学のなかで起きることになるだろうと私は予想している。哲学を志す者は、ぜひこの論議に加わってほしい。「無痛文明論」の最後の章で概要を語った「ペネトレイター」という概念もまた、この点に関わっている。今後の重要課題である。

吉本は、「無痛文明論」が、「内なる無痛文明」との戦いをよく描いている反面、「外なる無痛文明」との戦いは抽象論にとどまっていると指摘する。たしかにそれはそのとおりだと私も思う。「無痛文明論」は、まず自己との戦いを出発点に置き、そこから、社会全体の次元へと橋を架ける作業をしたのである。ただ、森岡が書くことのできなかった「外なる無痛文明」論は、誰かによって書かれなければならないだろう。それがいったいどのような姿を取る論考になるのかは想像できないが、非常に重要な仕事になると思われる。

以上、三浦、吉本両氏による批判にコメントするという形で、「無痛文明論」を再吟味してみた。このような試みは非常に有益なので、興味ある方はぜひ何かの形で批判を公にし、私や他の論者たちと議論して行ってほしい。そのための場所は、おそらく多く開かれているはずである。